

第11回京都学術会議に300人 質量ともに大幅に向上

本学会の第11回京都学術会議が10月8日、キャンパスプラザ京都で開催された。大会長は久保田正紀氏。昨年東京大会に匹敵する300人が全国から参加し、会場は満席となった。京都での開催は第3回大会以来2回目となるが、参加者の規模は当時に比して倍増、一般演題、ポスター発表とも具体化、充実した内容となり、質量ともに大幅な向上がみられた学術大会となった。

会場のキャンパスプラザは京都駅前にある。観光シーズンや学会シーズン真っ只中ということもあり、前日からのホテルの予約はまったくと言っていいほど取れない状況で、天候に恵まれたこともあり、京都駅周辺は観光客でごった返していた。

久保田会長の開会あいさつで始まった開会式は、冒頭、歴代大会長の名前が読み上げられ、代表して久保田会長に、学会のシンボルであるテミス像が吉田理事長より渡された。

続いて演題発表に移り、「腓骨骨幹部骨折の臨床例－ウオーターバッグを使用した施術」（瀧澤一裕、以下敬称略）、「メタボリックシン



300人の熱気があふれる会場

ドルームに対する腹式呼吸の有効性」（泉 圭）、「ヒト歩行モデルの研究における構造解析の学習」（落合弘志）など、臨床報告、研究発表の一般演題が7題、ポスタープレゼンテーションとして、「ランディングスタビライザー（歯科診療台装着用足底板）がもたらす循環動態への影響」（山村順ほか）、「自由落下を使ったウオーターバッグによる整復」（内藤昇ほか）の2題が発表された。またランチョンセミナーとして、水前寺診療所の住岡輝明氏が、「扁桃体について」の教育講演を行ったほか、クロレラ工業の菅野敏博氏が、有機イオウ成分の1つであるMSM（メチル・サルフォニル・メタン）の抗炎症作用と健康補助食品としての有用性について特別講演を行った。

本誌では各発表者に原稿執筆を依頼し、今号より順次掲載していく予定。

ポスター発表の掲示や実演も

本会場とは別に設置されたプレゼンスルームでは、ポスター発表の掲示・実演のほか、新医療技術開発機構の機器・用具類、健康食品から書籍までの展示・説明会が行われた。また、根橋豊光氏が開発した「テラベース」の体験コーナーが設けられ、希望者が殺到した。



会場のキャンパスプラザ京都